

目的 わが国に女子洋装が公式に正装として取り入れられたのは明治19年である。鹿鳴館時代を経て、やがて国風化してゆく世相に婦人洋装は衰微し、宮中や外交官関係または看護婦などの制服として一部に残るだけとなった。このように、この期の着用階級が特殊であったことから、着用範囲も限られており、考察の機会は乏しいと思われる。そこで、昭憲皇太后から女官に下賜された上衣、中衣(上・下)を一資料として、当時の服飾研究を進めた。

方法 実物調査による形態、材料、縫製方法、装飾技藝、着用年代などの考察を行なった。

結果 明治20年の皇后思召書によって国産品の使用を奨励されたが、実際は高級品のほとんどが「舶来品」であったと推定される。

上衣は、表地に白紋織タフタ、裏地には平織タフタが用いられ、シルクオーガンジイが装飾として重ねられている。中衣は、胴衣とスカートから成り、白平織タフタを用いてある。上衣と中衣胴衣は、身頃、袖とも全体に薄く真綿を入れた綿入れ仕立てになっており、零時のお召料であったことがわかった。明きのとめ方は、鉤ホック、鉤ホックと糸ループ、くるみボタンとボタンホール、貝ボタンとボタンホールと、場所に応じて四種類の手法が使われている。縁の始末は、バイヤスでは白い絹のテープが使用されている。

衿、袖、中衣スカートのデザインから、明治20年代後半から30年代にかけて製作された *Lobe Montant* と推察された。